

# 神戸北遺跡発掘調査報告

## ～多気郡大台町下三瀬所在～

2016（平成28）年3月

三重県埋蔵文化財センター



## 例　言

- 1 本書は多気郡大台町下三瀬に所在する神戸北遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、平成 26 年度一般県道高奈上三瀬線道路整備交付金事業に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部から執行委任を受けて実施した。
- 3 調査の体制等は次の通りである。

調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター  
平成 26 年度（現地調査）調査研究 1 課  
主幹 小倉 礼 副参事兼課長 泉 雄二  
平成 27 年度（報告書作成）  
主幹 小倉 礼
- 4 調査機関及び面積は次の通りである。

調査期間 平成 26 年 8 月 1 日～平成 26 年 10 月 24 日  
調査面積 658m<sup>2</sup>
- 5 調査にあたっては、地元の方々をはじめ、県土整備部・松阪建設事務所、大台町教育委員会のほか、大台町ふるさと案内人の会の多大な協力を得た。
- 6 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究 1 課が行い、本書の執筆・編集は小倉礼が行った。
- 7 当地は平面座標系第 VI 系に属しており、本書での方位は座標北を使用している。  
なお、座標値は世界測地系 2000 に基づいて表示している。
- 8 遺跡地形図及び調査区位置図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て、同組合所管の「2006 三重県共有デジタル地図（数値地形図 2500（道路縁 1000））」を使用し、調整したものである。（承認番号：三総合地第 93 号）
- 9 当発掘調査の記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化センターで保管している。
- 10 土層及び遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖（21 版）』（1967 年初版、1997 年第 19 版）による。
- 11 本書では、以下のように遺構の略記号表記をしている。

S K : 土坑 S B : 掘立柱建物 柱穴 : Pit
- 12 本書では、以下のように遺物の表記について統一している。

碗・塊・鏡 → 梗

# 本文目次

I	前言	1
1	調査に至る経過	1
2	文化財保護法に関する諸手続	1
3	調査経過	1
4	記録図面について	2
5	記録写真について	2
II	地理的環境及び歴史的諸環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	3
III	調査の成果（遺構）	7
1	基本層序	7
2	検出遺構	7
IV	調査の成果（遺物）	10
V	まとめ	11

## 挿図一覧

第1図	調査区位置図	2
第2図	遺跡地形図	4
第3図	遺跡位置図	5
第4図	S K 1・S B 2 遺構平面図	7
第5図	遺構平面図	8
第6図	土層断面図	9
第7図	出土遺物実測図	10

## 表一覧

第1表 遺跡一覧表

第2表 出土遺物観察表

## 挿入写真一覧

写真1 石碑（東から）

写真2 作業風景（北から）

## 写真図版一覧

- 写真図版1 調査区全景（北から）  
調査区全景（南から）
- 写真図版2 土坑1（東から）  
土坑1（南東から）
- 写真図版3 掘立柱建物 S B 2（東から）  
掘立柱建物 S B 2（南東から）
- 写真図版4 出土遺物

# I 前 言

## 1 調査に至る経過

大台町下三瀬では、一般県道高奈上三瀬線道路整備事業が行われている。この事業に伴い三重県松阪建設事務所から事業地内に埋蔵文化財に関する照会を受けた三重県埋蔵文化財センターは、周知の埋蔵文化財包蔵地である神戸北遺跡が所在することを確認し、今後協議が必要なことを回答した。

協議の結果、事業地内において範囲確認調査を実施することとなった。範囲確認調査（面積56m<sup>2</sup>）は、平成26年3月18日に実施し、調査坑から中世を中心とする遺物・遺構が確認できた。これを受け当センターは保護措置の必要があると判断し、県土整備部道路建設課に回答した。その結果、発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

## 2 文化財保護法に関する諸手続

文化財保護法（昭和25年法律第214号）および三重県文化財保護条例（昭和32年条例第72号）にかかる諸手続は以下のとおりである。

- 三重県埋蔵文化財保護条例第48条第1項
  - ・平成25年8月23日付 松建第615号  
三重県知事から三重県教育委員会教育長宛  
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（神戸北遺跡）
- 文化財保護法第99条第1項
  - (埋蔵文化財センター所長から県教育委員会教育長宛)
    - ・平成26年8月1日付 教理第155号
- 文化財保護法第100条第2項
  - ・平成26年10月27日付 教委第12-4423号  
三重県教育委員会教育長から大台警察署署長あて  
「埋蔵文化財の発見について（通知）」

## 3 調査経過

2014（平成26）年

- 8月1日 調査前の打ち合わせ
- 8月18日 調査区設定
- 8月20日 重機掘削開始

- 8月25日 重機掘削終了
- 8月26日 段階確認
- 8月27日 遺構検出を南側から開始。13～9ラインを終了
- 8月28日 雨天のため中止
- 8月29日 遺構検出、7ラインまで終了
- 9月1日 雨天のため作業中止
- 9月2日 遺構検出ほぼ終了
- 9月3日 遺構掘削開始。南側から開始、11列まで終了。攪乱や風倒木が多い。遺構密度が薄く、出土遺物量も全体に少ない。その中で弥生時代の土坑SK1を検出する。
- 9月4日 雨天のため作業中止
- 9月5日 雨天のため作業中止
- 9月8日 雨天のため作業中止
- 9月9日 遺構掘削、9ラインから南側を終了。土坑SK1掘削、写真撮影
- 9月10日 SK1の畔を取り去り、写真撮影。遺構検出は6ラインより南側を終了
- 9月11日 遺構掘削、4ラインより南側終了。調査区北西隅でさらに北に延びる土坑を伴う掘立柱建物が確認されていたため、北西部の拡張を開始
- 9月12日 拡張部の段階確認。安全講習
- 9月16日 遺構掘削終了。掘立柱建物に伴う土坑SK3の畔を残して掘削、写真撮影
- 9月17日 全景ほかの写真撮影
- 9月19日 SK3の個別図面作成
- 9月22日 遺構実測開始
- 9月24日 遺構実測
- 9月26日 柱穴の精査を行う。
- 9月29日 レベル入れを行う。
- 9月30日 土層断面図作成
- 10月4日 現地説明会開催。62名。現地説明会終了後に「大台町ふるさと案内人の会」の協力により、遺跡周辺の熊野古道や三瀬の渡し等の街道ウォークを開催
- 10月7日 西側の断面沿いに下層遺構を確認するた

め、重機にて掘削を行う。

10月10日 埋戻し終了

10月15日 現地引きわたし

#### 4 記録図面について

発掘調査の記録図面類は、遺構検出段階でグリッド単位の略測図（遺構カード・縮尺1/40）を作成し、これをもとに縮尺1/100の遺構配置図を作成することで、調査区全体の遺構を把握した。遺構掘削後の記録図面類の遺構平面図・土層断面図・個別遺構図については、縮尺1/20で手書き実測を行ったほか、現場の作業日誌も当センターで保管している。

なお、当道路工事にあたって図面類を取り寄せた結果、道路の測量は任意座標により設計を行っていたため、地区設定等の作業に利用することが出来なかつた。そのため、周辺での三角点等の国土座標を調べた結果、三重県企業庁による測量点が調査区に隣接地した地点に設置していることが判明したため、その座標を測量原点に利用して、遺構平面図等の作成にあたつた。また、グリッドの割付は、世界測地系に即した4m方眼を設定し、調査区が細長いことからX軸方向（西から東）はアルファベットを、Y軸方向（北から南）は数字を付与し、各北西角を小グリッドの名称とした。

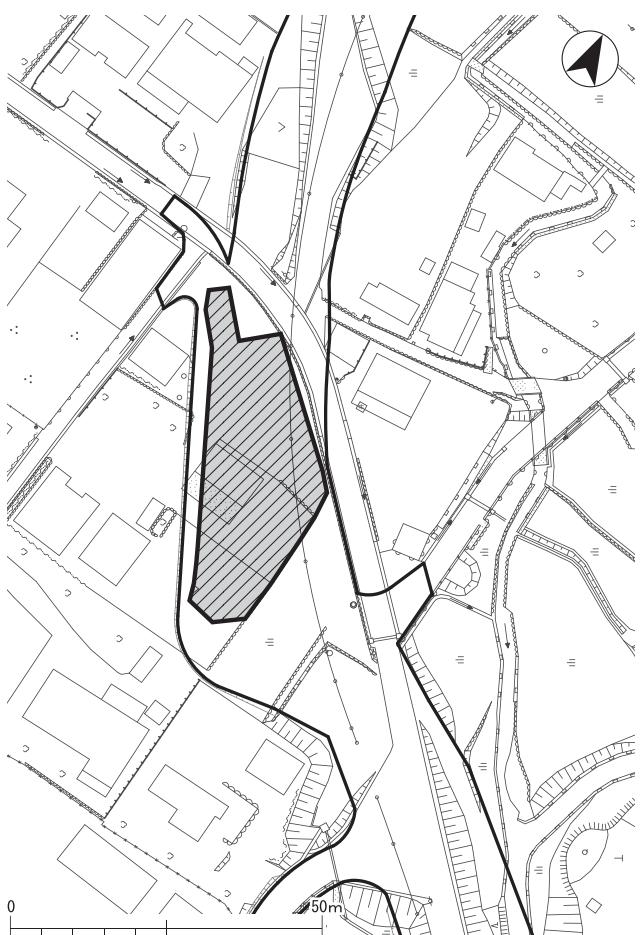
#### 5 遺構番号について

遺構番号はピットを除き、全てに通し番号を17まで付与したが、報告書作成にあたり、遺構は大きく二つであることから、弥生時代の土坑をSK1（旧SK2）、掘立柱建物をSB2、建物に付属する土坑をSK3（旧SK14）とした。ピットの遺構番号は、小地区ごとの通し番号としている。

#### 6 記録写真について

遺構写真については、調査区全景写真は4×5判（モノクロ・カラーリバーサル）で撮影した。また調査前状況や調査の進捗状況、各個別遺構、調査区及び各遺構土層の撮影は35mm判（モノクロ・カラーリバーサル）で撮影した。使用したカメラはトヨフィールド4×5判、35mm判ではニコンニューFM2である。またデジタル画像も適宜撮影した。

遺物写真については、プローニーの6×9判（モノクロ）で撮影した。



第1図 調査区位置図

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

神戸北遺跡（1）は三重県多気郡大台町下三瀬に所在する。三重県の中央部奥伊勢に位置し、多気郡の西半を占める大台町は旧大台町と旧宮川村の合併により成立したが、下三瀬は旧大台町の中心であつた三瀬谷地区の東部にあたる。

大台町の地形は、紀伊山地とそこから東流する宮川が作り出したV字谷及び河岸段丘から形成されている。宮川は中央構造線外帯の三波川変成帯に属し、基盤岩は泥質片岩である。この基盤層に由来する小規模の砂礫台地が大台町に点在するが、遺跡が存在する三瀬谷地区は宮川本流に最大の支流である大内山川が合流する地点の北岸にあたり、比較的大きな平坦面を有している。神戸北遺跡（1）は、この三瀬谷地区の東端、標高約80mの段丘上に位置し、小字名は「熊野往来下」である。

伊勢から熊野へ向かう熊野古道は、宮川と大内山川に沿って紀伊半島の山間部を南下するが、大台町高奈から大紀町滝原にかけては宮川の大きな陷入蛇行を無視して短絡し直線的に進む。高奈から坂瀬峠を越えた熊野古道は、遺跡の北から西を通り、神戸北遺跡のすぐ南の三瀬の渡しで宮川本流を渡河し、三瀬坂峠を抜けて大紀町滝原で大内山川の右岸に出る。神戸北遺跡の近くに「米配場」<sup>こめはば</sup>の地名が残っているように、下三瀬は陸路と宮川水運との結節点にあたっていた。また、宮川上流の湯谷峠を越えて吉野方面に向かう街道との分岐点でもあったことを示す石碑が、遺跡の筋向いに残っている。

宮川は治水工事が進む近年以前は水量が多く、川留めになることもしばしばで遺跡とその周辺には旅館が多かったと伝えられている。

今でも遺跡の北方を国道42号線とJR紀勢本線が走り、南方では近畿自動車道紀勢線が宮川を越えている。紀伊半島南部と伊勢平野を結ぶ交通の要所であると同時に、神戸北遺跡の中を通る県道高奈上三瀬線は三瀬谷地区の中心部を貫いて宮川左岸沿いに長ヶ地区へ繋がる重要な生活道路として、地域住民の日常を支えている。

### 2 歴史的環境

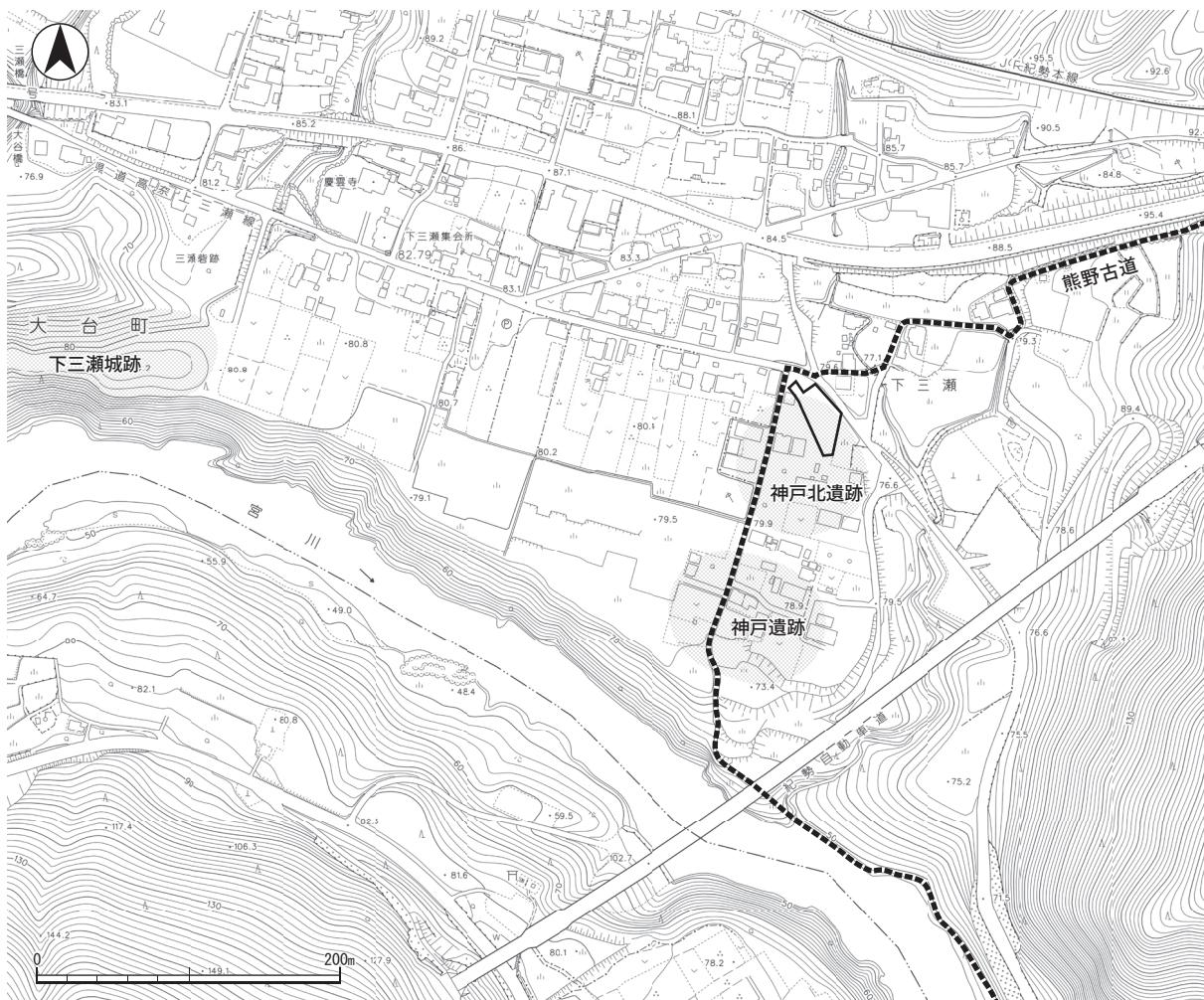
旧大台町町域にあたる宮川中流左岸の河岸段丘は、旧石器時代から縄文時代の遺跡が多い。宮川と支流の濁川が合流する柄原地区には、ナイフ形石器等、豊富な出土品で知られる出張遺跡<sup>①</sup>（大台町柄原）や早期の竪穴住居、煙道付炉穴等が検出された野添大辻遺跡<sup>②</sup>（大紀町野添）があり、またその周囲には茶園宮野遺跡（大台町柄原）、中島遺跡（同）、天理教前遺跡（同）、柄原遺跡（同）、黒ヶ谷遺跡（同）、新田遺跡（同）、岡ヶ野遺跡（同）が存在する県下でも旧石器時代の遺跡密度が高い地域である。三瀬谷地区においても、向林遺跡<sup>③</sup>（15）が旧石器から縄文時代の遺跡として知られている。縄文時代の遺跡数は大台町の遺跡数の半数近くを占めており、旧石器時代から縄文時代にかけて、大台町の地域に活発な生活が営まれたことがしのばれる。

しかし、弥生時代にはいるとその状況は大きく変化する。遺跡の数は減少し、柄原地区の岡ヶ野遺跡、本郷遺跡（大台町柄原）、川添地区の林地遺跡（49）、谷ノ上遺跡（55）、上菅地区の中沖遺跡（大台町上菅）が知られているだけである。宮川下流の平野部における弥生遺跡の繁栄とは対照的である。

古墳時代についても落人古墳群（大台町柄原）のみ<sup>④</sup>であり、長者野古墳群（大紀町滝原）とともに、宮川中上流域では数少ない貴重な例である。

古代において律令制のもと、大台町域は多気郡の一部となる。神三郡の内とされ、伊勢神宮との関係が強いと言われている。律令制の弛緩とともに神宮領莊園である御園が多く設置され、柄原御園、小栗生御園、長ヶ御園の名が「神鳳抄」<sup>⑤</sup>にみられるが、遺跡の数は非常に少なくなる。

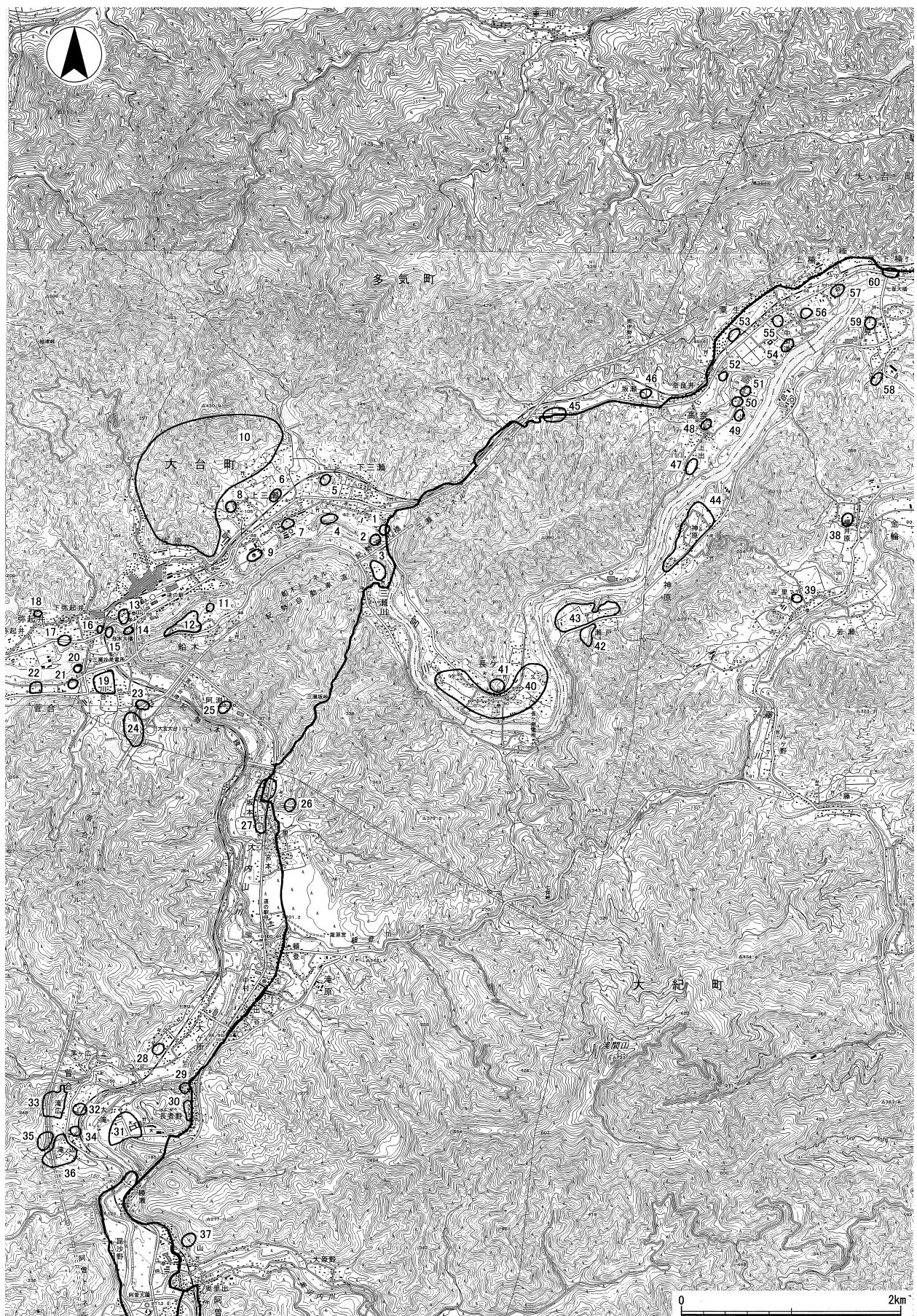
中世に入ると大台町域の遺跡数は増加する。古瀬戸の蔵骨器が出土した長ヶ中世墓群（41）や長ヶ遺跡（40）が神戸北遺跡の東南約1kmに存在するほか、城館が多く置かれている。南北朝期から戦国期にかけて、大台町域は北畠氏の勢力下に入ることから、その家臣に関連するものと考えられる。特に織田信長の侵攻により隠居に追い込まれた北畠具教が



第2図 遺跡地形図

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	神戸北	旧石器他	21	下菅中野西	旧石器	41	長ヶ中世墓群	中世
2	神戸	中世	22	下菅中野	—	42	樋ノ谷	縄文・中世
3	久保海道	—	23	東前	中世	43	樋ノ下	—
4	下三瀬城跡	中世	24	川合城跡	中世	44	若宮腰	—
5	中野	縄文	25	阿渕	—	45	ケヤ谷	縄文
6	上三瀬	縄文	26	野後城跡	中世	46	坂瀬	縄文
7	上三瀬東	縄文	27	河原	—	47	高瀬	縄文・中世
8	十南寺	中世	28	大ヶ所	—	48	浜井場下出	縄文
9	油谷西村館跡	中世	29	蝙蝠穴	弥生・古代	49	林地	弥生
10	上三瀬城跡	中世	30	金山	縄文	50	称名院前	中世
11	舟木中世墓	中世	31	長者野	弥生	51	久保	縄文
12	上り出	—	32	滝広	縄文	52	奈良井城跡	中世
13	佐原緑町	縄文	33	滝部	縄文	53	ウツ野	縄文・弥生
14	大台警察署西方	旧石器	34	滝部上組	中世	54	向海道	縄文
15	向林	旧石器・縄文	35	滝部A	縄文	55	谷ノ上	縄文・弥生
16	弥起井悪水の東	—	36	滝部B	—	56	西ノ谷	中世
17	下弥起井	縄文	37	阿曾城跡	中世	57	川添	—
18	上弥起井	縄文	38	櫃井原南	縄文	58	古ヶ山	縄文
19	川合	縄文	39	中里	—	59	稻垣外	縄文
20	中野	—	40	長ヶ	縄文・中世	60	下楠西	—

第1表 遺跡一覧表



第3図 遺跡位置図（1：50,000）〔国土地理院「伊勢佐原」1：25,000より作成〕

居城とした上三瀬城址（三瀬館、10）が上三瀬に築かれていることからも、北畠氏と三瀬谷地区の結びつきの強さが推測される。その家臣三瀬氏のものと伝えられる下三瀬城址<sup>④</sup>（4）は神戸北遺跡の東400mにある。このほか、奈良井城跡（52）、油谷西村館跡（9）、川合城跡<sup>⑦</sup>（24）などが濃密に分布している。集落跡としては、神戸北遺跡から約2.5km西南にある宮川右岸の東前遺跡<sup>⑧</sup>（23）で、鎌倉時代の土坑とともに室町時代の掘立柱建物3棟、土坑10基が確認されている。土坑のうち3基については土壙墓の可能性が高いとされており、室町時代の住居跡として大台町域では唯一の調査例である。

奥伊勢地域は戦国末期から江戸時代初期にかけて、織田氏、蒲生氏、服部氏、古田氏の支配・統治を経て元和5年(1619)に紀州藩領となり、勢州三領の一つとして田丸領に属した。大庄屋制のもと、現大台町域は山神組と下真手組に編成される。神戸北遺跡が所在する下三瀬村は下真手組の東端にあたり、山神組に所属する奈良井村、高瀬村、栗生村との間で坂瀬谷山論と呼ばれる境界争いを長年にわたり続けている。<sup>⑨</sup>

明治22年（1990）の町村制の施行にあたっては、千代村・柳原村・新田村・柄原村・神瀬村・下楠村・上楠村・栗生村・高奈村が川添村を、長ヶ村・下三瀬村・上三瀬村・佐原村・弥起井村・上菅村・菅合村・大ヶ所村が三瀬谷村を形成する。その後、両村が昭和31年に合併して旧大台町が成立、平成17年には宮川村と合併して現行の大台町が誕生した。

### 【註】

①大台町出張遺跡調査会『出張遺跡調査報告書』（1979年2月）

②三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第3次）』（2016年）

③皇學館大學考古学研究会『大台町の遺跡』大台町教育委員会（1975年）

④皇學館大學考古学研究会『大台町の遺跡』大台町教育委員会（1975年）

⑤『群書類聚』第一輯

⑥栗谷節二「第二章中世」『大台町史 通史』（1975年）

⑦下村登良男『川合城跡発掘調査報告』大台町教育委員会（2001年3月）

⑧三重県埋蔵文化財センター『東前遺跡発掘調査報告』（2004年3月）

⑨谷節二「第三章近世」『大台町史 通史』（1975年）

### III 遺構

#### 1 基本層位

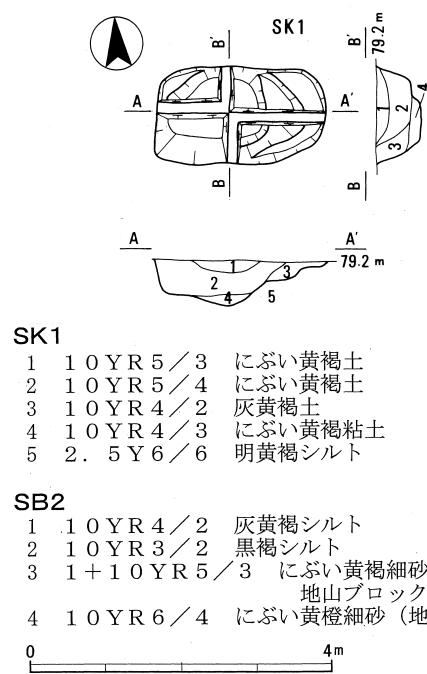
調査区は神戸川の扇状地に位置する。標高は、北東隅が標高80mと高く、南側に向かって傾斜をしており南西隅では標高は79mを測る。基本的な層位は、住宅建設に伴う盛土、旧表土、包含層で、包含層下の灰黄褐細微砂層（地山）で遺構検出を行った結果、風倒木が調査区全体に広がっていたほか、近代以降の溝群や住宅に伴う攪乱によって、大部分が削平を受けていた。

なお、神戸北遺跡の包蔵地カードによれば旧石器の石器が採集されていたこともあることから、調査区西壁に沿って、幅1mで断割りを行ったが、遺構検出面から下は遺物を含まない自然堆積層であることを確認した。

#### 2 遺構

遺構は、室町時代の掘立柱建物1棟と弥生時代の土坑1基を確認したのみで、近代以降の攪乱や時期不明の風倒木の痕跡が調査区全体に広がっていた。

柱穴は調査区の北側で多く検出しているが、掘立柱建物としてまとめたのは1棟だけである



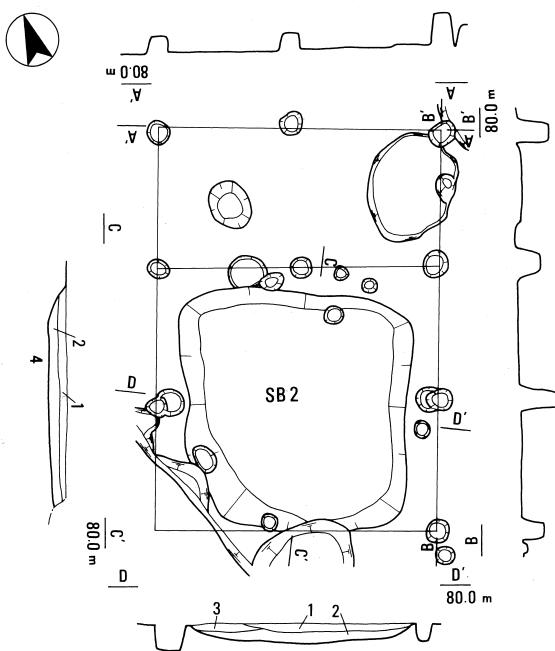
第4図 SK1・SB2 遺構平面図 (1:100)

#### 土坑SK1（第4図）

調査区の南側で検出した東西2.2m、南北1.3m、深さ0.5mのやや楕円形を呈する土坑で、上から0.2mほどで南北2.0mと規模を縮小してさらに深くなる。埋土の上方からは中世の土師器皿の小片が出土したほか、底部近くからは弥生時代後期の甕が出土した。中世の土師器皿は同位置に浅い遺構があった可能性もあることから混入と考え、下層遺物から弥生時代後期の遺構と考えた。

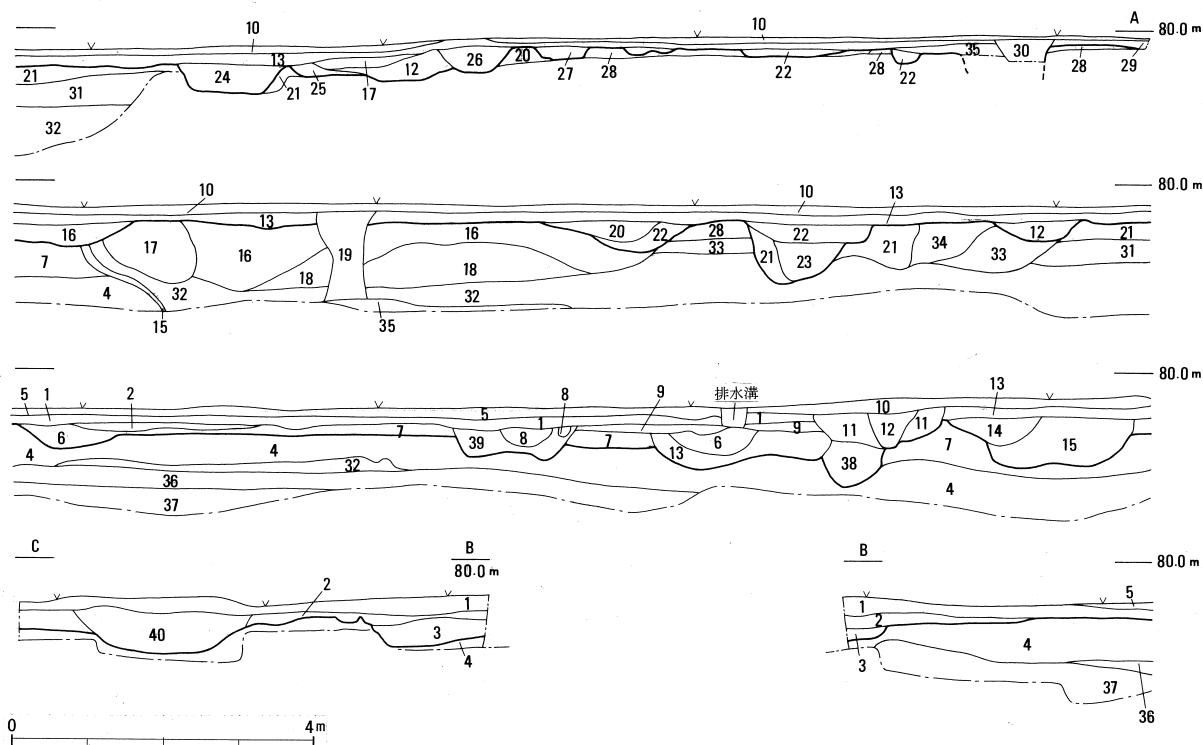
#### 掘立柱建物SB2（第4図）

調査区北西部で確認した桁行3間（5.4m：柱間1.9m等間）×梁間2間（3.8m：柱間1.9m等間）の南北棟で、建物内部南側に方形の土坑SK3を伴う掘立柱建物である。北側梁行は、さらに西側と北側に延びないことから3間×2間の南北棟と判断した。建物の方位は北で東に17度30分振れる。南側梁行の中央柱穴は攪乱によって壊され、西側柱穴は調査区外に延びる。建物内の南側には2間×2間分（3m×3m、深さ0.25m）を占める方形の土坑が設けられ、土坑北側に柱穴が位置することから建物内部は区画されたと思われる。

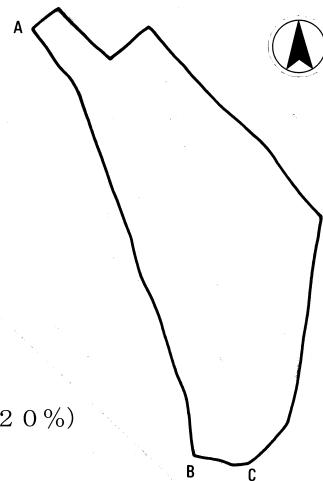




第5図 遺構平面図 (1 : 200)



- 1 10 YR 3 / 3 暗褐シルト (礫を含む)  
 2 10 YR 3 / 3 暗褐シルト  
 3 10 YR 3 / 1 黒褐シルト  
 4 10 YR 5 / 2 灰黄褐細粒砂 (地山)  
 5 10 YR 6 / 1 褐灰シルト (礫を含む)  
 6 10 YR 2 / 1 黒シルト  
 7 10 YR 5 / 3 にぶい黄褐極細粒砂  
 8 10 YR 2 / 3 黒褐シルト  
 9 10 YR 3 / 2 黒褐シルト  
 10 10 YR 7 / 1 灰白礫  
 11 10 YR 4 / 3 にぶい黄褐シルト  
 12 10 YR 4 / 2 灰黄褐シルト  
 13 10 YR 6 / 3 にぶい黄褐シルト (礫を含む)  
 14 10 YR 6 / 3 にぶい黄褐シルト  
 15 10 YR 3 / 1 黒褐シルト  
 16 10 YR 2 / 3 黒褐シルト (10 YR 4 / 3 にぶい黄褐シルトブロック 20 %)  
 17 10 YR 5 / 4 にぶい黄褐シルト  
 18 10 YR 3 / 4 暗褐シルト  
 19 10 YR 5 / 3 にぶい黄褐シルト (10 YR 7 / 3 にぶい黄橙シルクブロック 30 %)  
 20 10 YR 4 / 4 褐シルト  
 21 10 YR 6 / 6 明黄褐粘土  
 22 10 YR 3 / 2 黒褐シルト (礫 5 % 含む)  
 23 10 YR 2 / 1 黑粘土  
 24 10 YR 3 / 3 暗褐シルト (礫 10 % 含む)  
 25 10 YR 4 / 2 灰黄褐極細粒砂  
 26 10 YR 6 / 1 褐灰シルト (礫 30 % 含む)  
 27 10 YR 3 / 4 暗褐粘土 (礫 20 % 含む)  
 28 10 YR 5 / 4 にぶい黄褐粘土  
 29 10 YR 3 / 2 黑褐粘土  
 30 10 YR 6 / 1 褐灰極細粒砂 (礫 20 % 含む)  
 31 10 YR 5 / 2 灰黄褐極細粒砂  
 32 10 YR 5 / 1 褐灰極細粒砂  
 33 10 YR 5 / 2 灰黄褐極細粒砂 (礫 5 % 含む)  
 34 10 YR 5 / 2 灰黄褐シルト  
 35 10 YR 6 / 1 褐灰細粒砂  
 36 10 YR 5 / 1 褐灰極細粒砂  
 37 10 YR 5 / 1 褐灰細粒砂 (礫 5 % 含む)  
 38 10 YR 5 / 4 にぶい黄褐シルト (10 YR 4 / 2 灰黄褐シルトブロック 30 % 含む)  
 39 10 YR 5 / 4 にぶい黄褐極細粒砂 (10 YR 6 / 2 灰黄褐シルトブロック 30 % 含む)  
 40 10 YR 3 / 3 暗褐シルト (10 YR 5 / 2 灰黄褐シルト 10 % 含む)



第6図 土層断面図 (1 : 100)

## IV 遺 物

出土した遺物は、整理箱で3箱と非常に少ない。遺構から出土した遺物の時期は、弥生時代後期と室町時代のもので、その他の時期の遺物として、縄文土器の細片2点と近世の遺物がある。

### S K 1 出土遺物（1～3）

1は口縁部が受口状を呈する甕で、口縁部と体部は接合しないが胎土から同一個体と判断した。弥生時代後期のもので、下層から出土したことから遺構の時期判断の根拠とした。脚は付く例が大半であるが、脚は出土していない。

2と3は中世の土師器皿で、室町時代の範疇と思われる。埋土の上方から出土したことから、中世の浅い遺構や柱穴が重複している可能性もあることから混入と考えた。

### S B 2・S K 3 出土遺物（4～9）

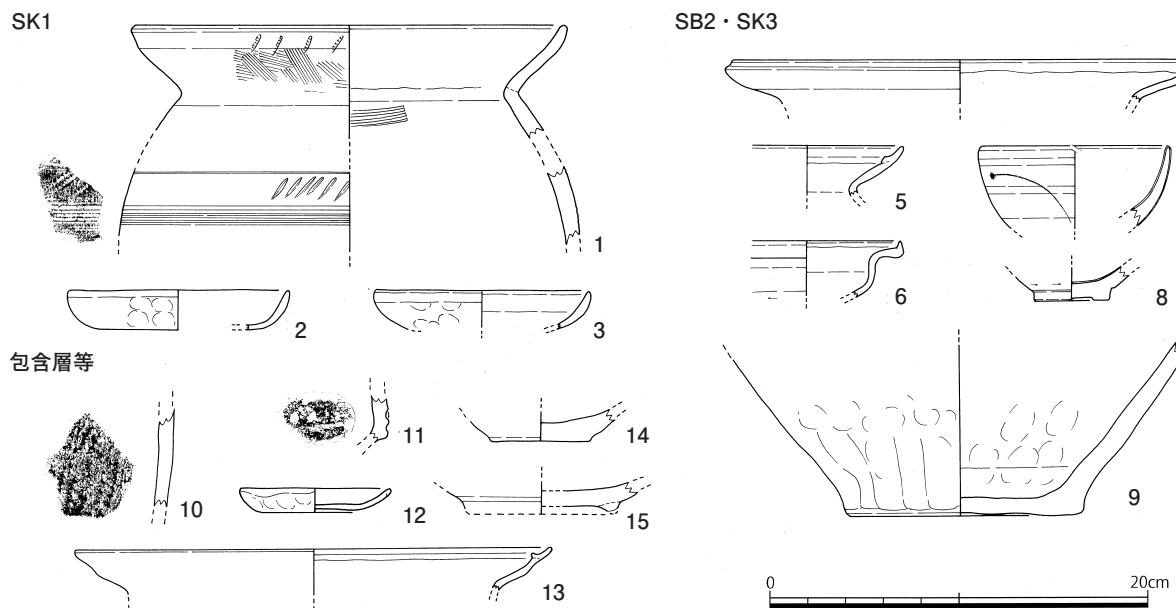
4は柱穴から出土した土師器鍋で、14世紀の室町時代のものである。

5～9は、掘立柱建物に伴う土坑SK3から出土した。掘立柱建物と同時期の室町時代の遺物のほか、江戸時代の遺物（6）も混在する。方形土坑の南側は攪乱によって壊されているほか、土坑と重複したPit等の遺物が混入したとも考えられる。土師器鍋

（4～6）、天目茶碗（7）、磁器碗（8）、陶器甕（9）などがある。

### 包含層・その他攪乱などの出土遺物（10～15）

縄文土器の破片は2片出土した。調査区両端のPitや土坑から出土したもので、いずれも混入と考えられる。10は体部片で早期末、11は口縁部付近の小片で中期末の深鉢である。



第7図 出土遺物実測図

## V まとめ

今回の発掘調査で検出された遺構は弥生時代後期の土坑が1基と、室町時代の土坑を伴う掘立柱建物が1棟のみである。また遺物は非常に少なく、そのほとんどは弥生時代後期と室町時代に属する。ただし縄文土器の早期末及び中期末の細片2点が出土している。また、近世以降の遺物が多く出土している。

神戸北遺跡は、宮川中上流域を占め、その大部分が山地である大台町の中心部に存在する比較的大きな平坦部である三瀬谷地区の東端部に位置する。今回発掘調査した区域の西側を熊野古道が南北に走り、遺跡の南で宮川を渡河している。三瀬谷地区の平坦部の中でも水陸交通上の要衝に位置している。

のことから、今回の調査区域がいつの時代においてもこの地に暮らす人々にとって極めて価値の高い場所であり、このため現在に至るまで繰り返し利用されてきたことが推測される。今回の調査で縄文時代早期末以降の幅広い時代の遺物が出土しながら、その量が少なく、また遺構の残存状況がよくないのは、そのためと考えられる。近世以降の攪乱と風倒木の跡が非常に多く、多様な時代の遺物が散見されながら発掘調査の成果としては豊かとはいえない結果となったことは残念である。

### 1 弥生時代の土坑

調査によって検出した弥生時代後期の土坑は、平面形が東西に長い橢円形状であり、規模は長径が2.2m、短径が1.3m、深さは西側が深く50cm、東側が浅く20cmである。中世の土師器片も出土するが、下層から出土した遺物により弥生時代後期のものと推定する。土坑の性格については判断しがたい。

大台町のある宮川中上流左岸は、旧石器時代のものとしては三重県を代表する遺跡である出張遺跡が柄原地区に存在し、また、縄文時代の遺跡も多数存在する。しかしその一方で弥生時代の遺跡は極めて少なく、これまで川添地区の中期から後期にかけての3か所（林地遺跡・ウツ野遺跡・谷ノ上遺跡）しか知られておらず、しかも遺構は確認されていなかった。神戸北遺跡が三瀬谷地区における弥生時代の遺

跡の初例となるとともに、この土坑が弥生時代の遺構として大台町内で初めて確認されたものである。

この発掘調査が今後の周辺域の発掘調査により、宮川中上流域の弥生時代の人々の生活を明らかにしていく上で一つの契機となることを期待したい。

### 2 室町時代の掘立柱建物

室町時代の遺構としては、土坑を伴う掘立柱建物を1棟確認した。建物の規模は南北に長い3間×2間の側柱建物である。南側の2間×2間の部分に3m×3m、深さ25cmの方形の土坑が内接するのが特徴である。

室町時代の掘立柱建物が確認されたのは、大台町内では三瀬谷地区の西端、宮川本流の右岸にある東前遺跡に次いで2例目となる。室町時代の土坑を伴う掘立柱建物の検出例は少ないが、県内においては度会町鮎川の鮎川西出B遺跡<sup>①</sup>が知られている。

この周辺一帯の政治経済の中心地であったことが、ここに掘立柱建物が残された一つの背景であろう。

建物に組み込まれた土坑の性格は残された遺物がきわめて少ないとではその性格を確定的に論じることは難しいが、近世以降の例として、家畜を飼う空間について、建物の一部を掘り下げて使用する例がみられることから、牛馬などの家畜を置いた建物である可能性がある。このような建物は近世以降に全国各地で確認されており、三重県教育委員会の1973年の古い民家の間取りに関する調査でも、一般農家において相当数が確認されている。

神戸北遺跡の小字名が「熊野往来下」であることから解るとおり、熊野古道は調査区の西側を通り北西部のT字路を東に折れて伊勢方面へ延びる。ここでT字路を西に直進すると下三瀬城跡の前を抜けて宮川上流へと繋がる。このことを示す後述する石碑が調査区の北西の筋向いに残されている。

掘立柱建物が検出された調査区西北端はこの交差点にもっとも近い場所になる。街道をこの交差点から渡船場に向かって南に下ると「米配場」と呼ばれる地名が今も残るが、これは三瀬の渡しが陸上交通

の拠点であっただけでなく、河港でもあったことを示している。

これらのことを考え合わせれば、今回確認された土坑を伴う掘立柱建物が、物資運搬に用いた家畜にかかる施設であった蓋然性は高いといえよう。今後、神戸北遺跡の熊野街道に接する場所もしくは神戸北遺跡より西側の下三瀬城跡へ続く道沿いにおいて発掘調査が進み、この掘立柱建物の性格がより明確になってくるであろうことを期待したい。

### 3 熊野街道について

神戸北遺跡の性格を大きく規定しているのが熊野街道の存在である。この熊野街道は伊勢から紀伊半島南部へ延びる街道で、熊野大社に通じる信仰の道として一部が世界遺産に登録されているが、同時に中山間地の住民と平野部の住民、また熊野灘沿岸部の住民を繋ぐ生活の道でもあった。皇族・貴族が利用した紀伊路と比較して伊勢路は庶民の道であったといえる。

伊勢神宮から熊野大社へ延びる熊野街道は、伊勢平野を西に、田丸から女鬼峠を越えて宮川左岸に出ると川添から宮川本流の湾曲を短絡して坂瀬峠を越え、神戸北遺跡を貫いて南下し、三瀬の渡して宮川本流を渡河する。対岸の多岐原神社の前を通って三瀬坂峠を越え、滝原宮に至り、ここから宮川支流の大内山川沿いに熊野灘を目指していく。現在の国道・鉄道と比較して、川添から滝原までをほぼ直線で結んでいたのである。女鬼峠から紀勢国境まで宮川・大内山川に沿った割合に平坦な道が続く中で、神戸北遺跡の前後だけは峠越えが存在し、かつしばしば川留めとなる宮川本流の渡船があった。神戸北遺跡が存在する三瀬谷地域の東端が交通の要衝として栄えていたことはこの街道上の位置に因るものであるといえよう。

室町時代の大台町域は、北畠氏の支配下にはいる。建武の新政が短命に終わった後、南朝の有力者北畠親房の次男顕能が伊勢国司に任じられ、以来戦国末に織田信長により滅亡に追い込まれるまでの約230年にわたり伊勢南部を支配した。戦乱が続く中、田丸城を退いた北畠氏は根拠地を雲出川最上流の津市美杉町多気に置く。

多気と伊勢神宮及びその外港にあたる大湊とを結ぶ街道は戦国大名北畠氏にとって極めて重要なものであり、三瀬谷地域は根拠地である多気から宮川流域とを結ぶ地点としてその重要度を増していく。このことは大台町域の中世城館の発達という形で考古学的にも裏付けられる。大台町域での武士で北畠氏の家臣団に名を連ねているものも多数みられる。

また、大河内城での籠城戦の結果、織田信長により家督を奪われた北畠氏の最後の当主北畠具教はその隠居所に三瀬館を選択する。結果としてこの館が名門北畠一族終焉の地となる訳であるが、三瀬谷地域と北畠一族との密接なつながりが想定できる。神戸北遺跡の西400mには北畠家臣団に属した三瀬一族の居城である下三瀬城跡が存在する。

また、神戸北遺跡は熊野街道と他の道が交わる場所でもあった。調査区の北西の交差点の南西の角に現存する石碑には東面に「すぐ れいふ栗谷神道是より三里二十四丁 左くまの」、南面に「右いせみちはより宮川まで七里」、北面に「よしのはせかうや京大坂道」、西面に「文化七年二月建焉 施主山田○○」と彫られている。靈符山太陽寺は宮川左岸を約16km遡った支流の栗谷川沿いの小盆地に所在する曹洞宗の名刹で、永延二年（988）に花山法皇が参籠・潔斎したと伝えられる。16世紀に北畠氏の家臣により建立され、今も熊野灘の漁業者等の厚い信仰を集めている。栗谷川の最上流部から湯谷峠を越えると櫛田川上流に至り、高見峠を経て吉野・長谷寺・京・大坂方面につながる。宮川上流の山村の生活道路であると同時に畿内へと繋がる街道がこの地点から分岐しているのである。

現在、三瀬谷地区の中心地は神戸北遺跡より約2km西方の佐原に移っており、町役場、商業施設、教育機関等もそちらに置かれている。明治35年（1903）の舟木橋架橋以後の道路と鉄道の敷設にあたり、三瀬坂峠を迂回して宮川本流の渡河地点を西側にとり、佐原から舟木への経路が選択されたためである。

熊野街道は「紀伊山地の霊場と参詣道」としてその一部が世界遺産に登録され、昨年2015年に10周年を迎えた。全国から訪れる人も多く、高い注目を集めている割にはその歴史上の姿が明らかになってい

る部分はさほど多いとは言えない。信仰の道であるとともに、地域住民の生活のための道でもあったこの街道の過去の姿は、まだまだ明確になっているとは言い難いのである。ことに発掘調査の対象となつた箇所は思いの外少ない。そもそも奥伊勢から東紀州にかけては発掘調査自体があまり行われてきていないのである。その中で今回の発掘調査が実施され、現場作業員として地元の方に加わっていただくとともに、現地説明会を実施できたことは、熊野街道への興味と関心を喚起するとともに、埋蔵文化財の発掘調査への理解を進める上でも価値があったと考え

ている。わけてもこの現地説明会の実施に際して、「大台町ふるさと案内人の会」のご協力による周辺史跡のフィールドワークを行うことができたことは、街道沿いの発掘調査の公開と普及の一つの在り方を示すことができたと考えている。

#### 【註】

- ①三重県教育委員会『鮎川西出B遺跡発掘調査報告』(1999年)



写真1 石碑（東から）

報告書番号	登録番号	器種	正式遺構番号	取上げ名 出土位置	最大口径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚さ の他 (cm)	調査技法の特徴	粘土	焼成	色調	残存	備考
1	002-01	弥生土器 瓢	SK1	F11 SK2	22.4			口縁外：ヨコナデ→刺突文、内ヨコナデ 体外：縦ハケ→彫彫・刺突文、内：横・少	密	良	外：にぶい黄橙10YR5/3 内：橙7.5YR7/6	1/12残	
2	002-02	土師器 皿	SK1	F11 SK2	11.2			ナデ+オサエ→ヨコナデ	密	良	内外両面：灰白2.5Y8/2	1/12残	混入
3	002-03	土師器 皿	SK1	F11 SK2	11.6			ナデ+オサエ→ヨコナデ	密	良	内外両面：灰白2.5Y8/2	1/12残	混入
4	003-01	土師器 瓢	SB2	B2 Pit 1	24.0			口縁外：ヨコナデ	密	良	外：灰黄橙10YR6/2 内：にぶい黄橙10YR7/3	1/12残	
5	001-04	土師器 瓢	SB2	B3 SK14				工具形→ヨコナデ→ヨコナデ	密	良	外：黒褐色5Y2/1 内：にぶい赤燒5YR5/4	小片	
6	001-05	土師器 瓢	SB2	B3 SK14		-	-	ロクロナデ→ヨコナデ	やや密（～1mmの砂粒含む）	良	内外両面：にぶい黄橙10YR6/3	小片	
7	001-02	陶器 楠 (天目茶碗)	SB2	B3 SK14			高台径 4.0	ロクロナデ→出し高台→施釉	密	良	外：灰黄2.5Y7/2（素地） 内：黑10Y2/1（釉）	高台部6/12残	
8	001-01	磁器 楠	SB2	B3 SK14下層	9.8			ロクロナデ→外面下半ヨコナデ→施釉	密	良	内外両面：明オリーブ灰5GY7/	口縁部3/12残	
9	001-03	陶器 瓢	SB2	B3 SK14下層			高台径 11.8	工具形、底部外表面調製	やや粗（～2mmの砂粒含む）	良	内外両面：にぶい褐5.5Y6/3	高台部10/12残	
10	003-03	漢文 深井	楕削木	F9 SK3				体部片：ナデ→施文	やや粗（～1mmの砂粒含む）	良	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄橙10YR7/3	小片	
11	003-04	漢文 深井	柱穴	C3 Pit2				後縁部片：ナデ→沈線、刺突	やや密（～0.5mmの砂粒含む）	良	内外両面：にぶい褐7.5YR7/4	小片	
12	003-02	土師器 瓢	搅乱	C3 Pit 1	25.0			口縁内外：ヨコナデ	密	良	外：褐焼7.5YR4/1 内：にぶい黄橙10YR7/3	1/12残	搅乱
13	003-05	陶器 楠 (山茶碗)	搅乱	C3 Pit 1	-	-		ロクロナデ→高台部貼付後ナデ→糸切痕後ナデ	やや密	良	内外両面：灰白2.5YR7/1	小片	底部片
14	001-06	陶器 楠	搅乱	F5 SK15			高台径 5.2	糸切痕→ヨコナデ	密	良	内外両面：灰黄2.5Y7/2	高台部12/12残	底部外面・トナ痕3か所
15	003-06	土師器 皿	包含層	試掘坑 4 包	7.9	1.3		ナデ+オサエ→ヨコナデ	密	良	内外両面：浅黄橙10YR8/3	6/12残	

第2表 出土遺物観察表



写真2 作業風景（北から）



写真図版1 調査区全景（北から）



写真図版1 調査区全景（南から）



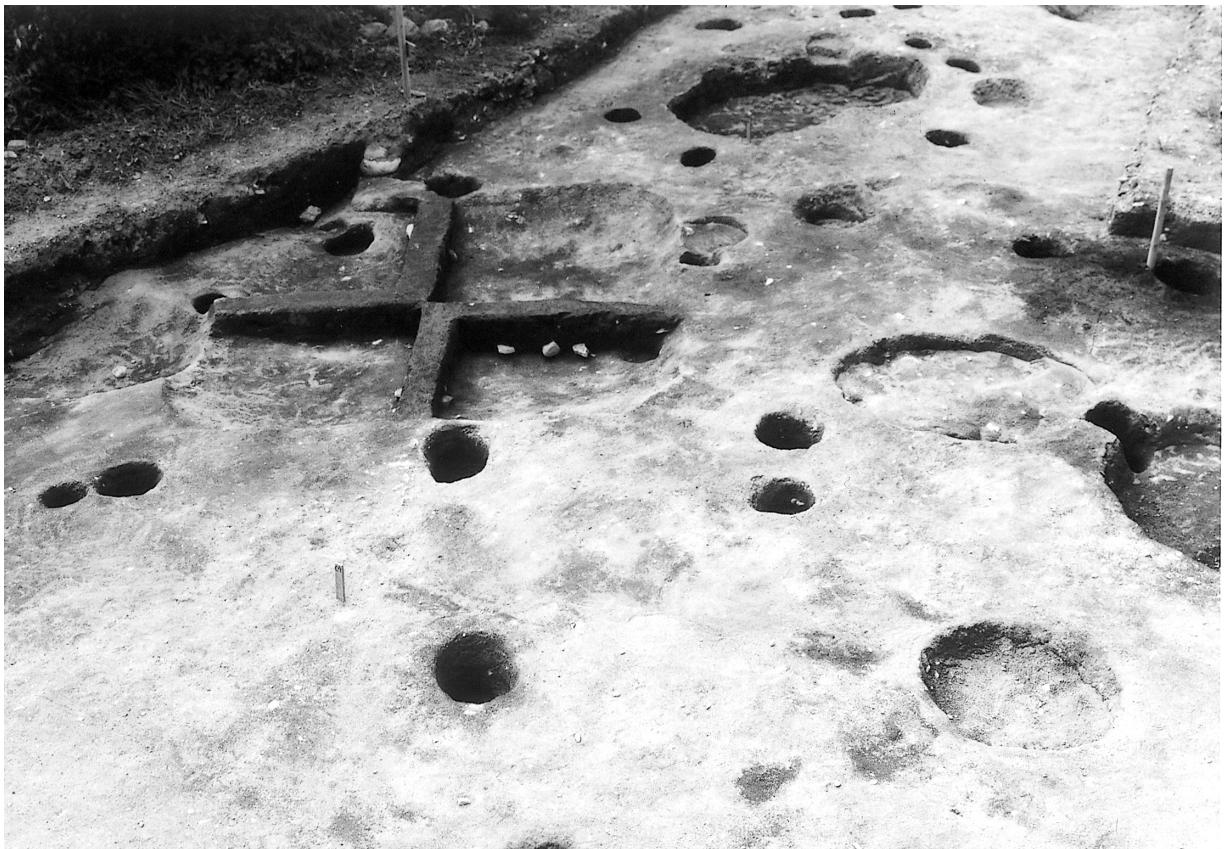
写真図版2 土坑1（東から）



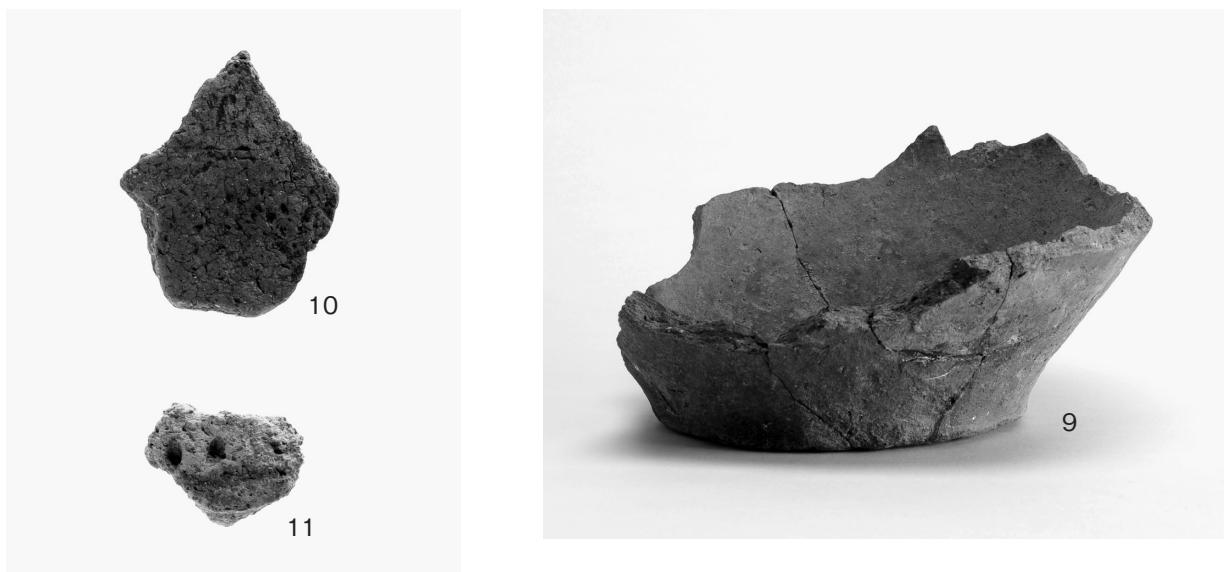
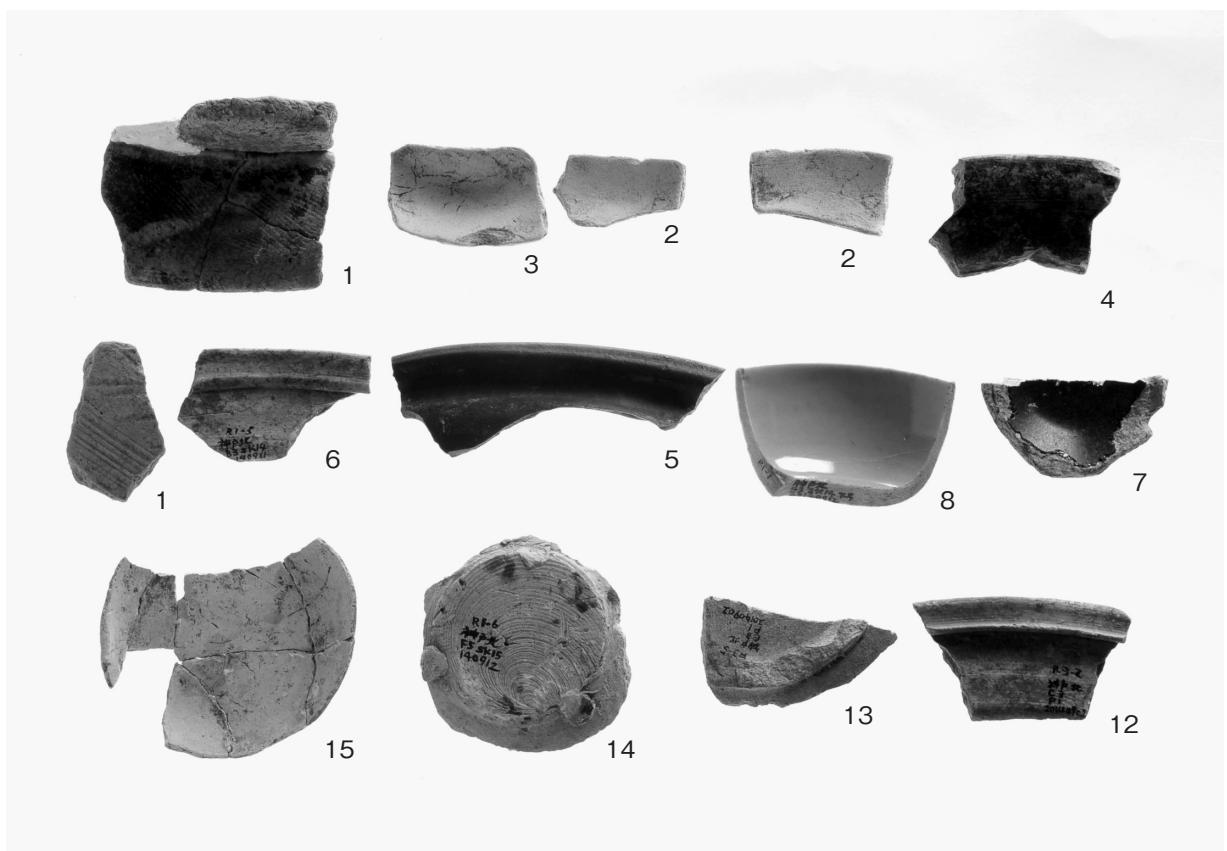
写真図版2 土坑1（南東から）



写真図版3 挖立柱建物 SB 2 (東から)



写真図版3 挖立柱建物 SB 2 (南東から)



写真図版 4 出土遺物

# 報 告 書 抄 錄

---

三重県埋蔵文化財調査報告 369

## 神戸北遺跡発掘調査報告

～多気郡大台町下三瀬所在～

2016（平成28）年3月

---

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印刷 (有)ミフジ印刷

---

